

福島広報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 小島 英二
編集 同 広 報 部



【巻頭言】

教育の原点「生きる」

福島市立吉井田小学校長 遠藤 嘉人

「2020東京オリンピック開催まで1年を切りました。パラリンピック開催まで1年となりました。」などの報道が至る所で聞かれ、それに合わせるように、様々な国際大会が世界各地で開かれるようになりました。来年の東京オリンピックやパラリンピックでは、各国の代表選手が、自分の力をあらん限り発揮している姿を目の当たりにすることで、世界中の人たちと感動を分かち合いたいと思います。

健常者が、持って生まれた体の限界に挑戦していくオリンピックもすばらしいと思うのですが、私は、障がいのある人たちが、自分のハンデキャップを乗り越えていこうとするパラリンピックに、どうしても強く心を引かれてしまいます。

2学期の始業式で、香川県の車いすバスケットボールチームで練習に励んでいる青年、坂田選手の動画を見せました。彼は、中学高校とバスケットボールを続けていましたが、突然下半身が動かなくなる病に襲われ、車いすでの生活を余儀なくされました。その環境の中で坂田選手が語った言葉、「健常のバスケができないんだったら、車いすバスケをしよう。バスケはバスケで同じ。」

さらに、思い出される言葉があります。リオデジャネイロパラリンピックに出場した選手の「私は事故で右足を失った。そして左足は残っている。失った右足を後悔して生きるのか、残った左足の可能性を見て生きるのか。私は、後者を希望と呼ぶ。」

この二人の言葉には、どれほどの挫折や苦労や涙、そして決意や励みや喜びが隠されているのか計り知れません。きっと、マイナスをプラスに変

えてきた者が語れる「強さであり、優しさであり、柔らかさ…」が、その言葉を紡ぎ出していると思います。私がもし、突然下半身が動かなくなったら、何と言って自分を慰め、勇気づけ、立ち直らせていくことができるでしょうか。残った左足に希望を見いだして生きていくことができるでしょうか。自問自答しても自信のある解答が見い出せずにいます。

しかし、パラリンピックにおいて私たちは、間違いなく目の前にその人たちを見ることが出来ます。現実には大きな壁を乗り越え、後悔を希望に転じてきた人たちをであります。(実際、彼らは、そのようなことは臆面にも見せませんが。)

昨年「原点回帰」という言葉が聞かれました。教育の原点とは…、授業の原点とは…、パラリンピックにおいては、「人としての原点」、つまり「生きる」ことそのものを生身の人間を通して見る事ができます。

普通に生活している子、いじめる子、いじめられる子、不登校の子、自分の命を絶ってしまう子など、子どもたち一人一人の置かれている状況は違いますが、今「生きる」と言うことを、真剣に問い直すことが必要ではないかと思えます。

前回のリオデジャネイロパラリンピックの開会式において、会長のカルロス・ヌズマンさんが話した「心に限界はない。見た目は違っていても、同じ心を持った人たちです。全ての人に心があふる。」は、障がい者、健常者の別なく、万人に語りかけているものと思います。

教育の原点に、人としての原点「生きる」を再確認していきたいと思っています。

特色ある学校

福島市立飯野小学校長 佐久間善一

4年生教室前の廊下で蚕がおいしそうに桑の葉を食べている。4年生の子どもたちは、蚕を嫌がる様子もなく、「お蚕様」といって大切に育てている。虫は嫌いだと誰か言いそうなものであるが…。

蚕は繭となる。飯野川俣地区は、古くから養蚕と生糸による産業で栄えた地域である。衰退してきたものの、今でも地域には、はたおり工場が残っている。校長として、児童に地域で栄えた産業のことを、体験を通して学べるようカリキュラムをつくるのが大切であると考えている。

4年生の春には蚕を手に入れ育てる活動を行う。育て方やえさのあたえ方、繭ができるまでを、地域の方々から学ぶ学習を行う。

4年生の秋は、繭から糸をつくる。繭を煮て、細い糸を時間をかけて取り出す。キラキラした絹糸の輝きを見て子どもたちは歓声をあげる。

4年生の冬、県北地方で使われてきたはたおり機を農家から譲り受け、昔のはたおり機を再現し、絹糸でのはたおり体験を行う。小学生でもはたおりができるように、専門家の指導を受けて再現させた。

できた布は、3年生へプレゼントする。3年生は、その布でつるし雛をつくり、つるし雛祭りに参加する。

それぞれの活動には、地域の方々やたくさんの専門家が指導に入っている。

絹糸を中心とした学習は、地域を理解するきっかけとなる。絹という素材の価値の高さを再認識するとともに、先人の大変な苦勞と勤勉さを理解することができる。そして、今後の地域のあり方も考えさせられる良い教材である。子どもたちが大人になり、生活や仕事で絹糸に関わる場面が出てきたときに、ふるさとを思い出すことを願う。

欠席の意味することを大切に

福島市立平野小学校長 重巢 吉美

感染症と人類の闘いは終わらない。感染源となる細菌やウイルスは、宿主ができるだけ消滅しないよう上手に生き続け、自らも外からの攻撃に対しすぐに変化して生きていくからである。ここで、壮大な話をするわけではないが、学校も感染症とは無関係ではない。

中でも「インフルエンザ」は、学校における最大の感染症であろう。感染力も強く、症状が重症化すると命にもかかわる疾患である。どのように取り組んでも、児童が集団で生活している学校で防いでいくことは難しい。感染源の侵入を防ぎ、個体の抵抗力を高め、感染ルートを遮断しない限り感染は拡大するからである。

授業の時間が心配される昨今に、臨時休業をすることはなかなか厳しいが、学校運営をしていく上で、児童の学校での学習・生活の安全・安心を保障することが困難な時には、せざるを得ないことであると再認識した昨年度であった。

欠席児童の理由の中で、「かぜ」「胃腸炎」を見つめる。人数は？兄弟姉妹は？いつから？増えているのか？一つの学級だけなのか？様々情報を得ながら確認し様子を観察する。罹患者の増加傾向時の対応についても養護教諭を通じて担任へ指示をしながら観察するようにしている。小さなことだが、欠席の情報を得た時にどのように考えるのかは、感染症にとどまらず大切であると思っている。今後も、欠席数を単なる数字ではなく意味あるものとして捉え、それぞれの担当から情報収集をすることを大切にしていきたい。

そして、児童の体力向上や自己有用感を高めることが、個々の児童の感染症への抵抗力を高めること（疾病予防措置）にもつながっていることを忘れずに、日々の教育活動に邁進していきたいと2学期を目前にして思ったところである。